

富山縣下農山漁村乳幼兒檢診成績

第2報 榮養方法，疾病狀況，佝僂病性變化ニ就テ

金澤醫科大學小兒科學教室（主任泉教授）

小 泉 健 吉
Kenkichi Koizumi

中 野 長 藏
Cho-o Nakana

影 山 秀 康
Hiroyasu Kageyama

伊 藤 隆 信
Takanobu Ito

吉 池 一 郎
Ichiro Yoshiike

矢 野 穆 彦
Yoshihiko Yano

（昭和18年7月13日受附）

内 容 抄 録

余等ハ本報告ニ於テ昭和17年9月檢診ヲ實施セル富山縣下ノ農漁村3，農山村2ニ就キ榮養方法殊ニ乳兒期榮養法，混合榮養補給品，離乳ノ狀況，及ビ疾病ノ

狀況，殊ニ佝僂病性變化，血色ニ關シ集計結果ヲ記述セリ。

目 次

第1章 緒 言

第2章 榮養方法

第1節 乳兒期榮養法

第2節 混合榮養補給品

第3節 離乳ノ狀況

第3章 疾病ノ狀況

第4章 佝僂病性變化ニ就テ

第5章 血色ニ就テ

第6章 總 括

第7章 結 語

參考文獻

第1章 緒 言

余等ハ昭和17年9月富山縣厚生協會ノ委囑ニヨリ富山縣下ノ農漁村3ケ村，農山村2ケ村合計5ケ村ノ育兒檢診ヲ行ヘリ。其ノ發育狀況ハ既ニ第1報ニ報告セシガ，富山縣下農山漁村小兒ノ體位ガ離乳期前後ニ於テ他府縣乳幼兒平均値ニ著シク劣ル外，頭圍，胸圍ガ特異ナル發育

ヲ遂グル事實ハ又興味アル點ナリ。

余等ハ本報告ニ於テ體位ト密接ナル關聯ヲ有スル榮養方法，疾病，佝僂病性變化，血色等ニ就テ得タル所見ヲ記シ，諸賢ノ御參考ニ供シ御批判ヲ仰ガントスル次第ナリ。

第2章 營養方法

第1節 乳兒期營養法ニ就テ

乳兒ノ體位ガ營養方法ト密接ナル關係ヲ有スルハ論ヲ俟タザル處ニシテ育兒指導ニ際シ、之ガ實狀ヲ把握シ置クハ極メテ肝要ノ事項ニ屬ス。日本ニ於ケル農村方面ノ乳兒營養法ノ特殊性ニ關シテハ既ニ諸家ノ注意スル所ニシテ2, 3ノ報告アリ。一般ニ都市ハ農村ニ比シ混合營養ガ少ク人工營養多數ナルニ反シ、農村ハ混合營養高率ニシテ人工營養低率ナリ。例ヘバ中江氏等ニヨル名古屋市ニ於ケル乳幼児審査會ノ調査ニテ、滿6ヶ月以前ノ營養法ハ昭和16年度母乳營養82.4%, 混合營養15.4%, 人工營養2.2%。昭和15年度母乳營養80.8%, 混合營養14.5%, 人工營養4.7%。東京市小兒(昭和12年度東京府衛生課調査ニヨル)母乳營養78.2%, 混合營養11.6%, 人工營養10.2%ナリ。之ニ對シ農村乳兒ニ就テノ報告ニテハ、高橋實氏ハ昭和14年岩手縣志和村ヲ調査シ、母乳營養75%, 人工營養或ハ人工營養ヲ主トスルモノ27%ナリトシ、横井博一氏ハ愛知縣ノ無醫村神戸村、下山村ノ昭和16年度調査ニ於テ下山村、母乳營養65.9%, 混合營養28.5%, 人工營養5.6%, 神戸村母乳營養65.9%, 混合營養28.5%, 人工營養2.1%ニシテ混合營養ノ高率ナルヲ注意セリ。今本檢診ノ農漁村、農山村ニ於テ生後6ヶ月迄ノ營養方法ヲ觀ルニ第1表ノ如シ。尙6ヶ月ト限定セルハ、7ヶ月以後ニテハ離乳準備ノ爲他ノ食品ガ補給セラルルヲ以テ、母乳分泌不足ニヨル混合營養トノ判別ヲ不可能ナラシムルヲ以テ、此ノ如ク限定セリ。

第1表 乳兒期營養法

	農 漁 村	農 山 村
母乳營養	107(60.9%)	125(70.6%)
混合營養	67(38.1%)	51(28.8%)
人工營養	2(1.1%)	1(0.5%)

次ニ乳兒期營養法ト營養狀態トノ關係ヲ觀ルニ第2表ノ如ク、營養狀態ヲ良、普通、不良ノ3階段ニ分チ比較スルニ混合營養ヲ行ヘルモノニ不良ノモノ多シ。

第2表 營養法ト營養狀態トノ關係

	良	普通	不良
母乳營養	31(46%)	33(49%)	3(5%)
混合營養	5(25%)	10(50%)	5(25%)
人工營養		1	2

第2節 混合營養補給品

前記ノ如ク混合營養、人工營養乳兒ノ營養狀態著シク不良ナルハ一ニ補給品ノ不適當ニ因スルモノナルコトハ直チニ推測シ得ル所ニシテ、之等ノ事情ハ平時ニ於テ、土地ノ風習、產物ニ影響サルル外戰時ニ於テハ輸送、配給狀態ニ左右セラルルコト甚大ナリ。今調査所見ヲ見ルニ第3表ノ如シ。

第3表 混合營養補給品

	牛乳	粉乳	山羊乳	牛乳+重湯	粉乳+重湯	山羊乳+重湯	煉乳	煉乳+重湯	重湯(スリコ)	粉乳+煉乳	其ノ他
農漁村	5 (8.6%)	8 (13.8%)	4 (6.9%)	14 (24.1%)	3 (5.2%)	5 (8.6%)	3 (5.2%)	2 (3.4%)	12 (20.6%)		
農山村	1 (2.0%)	3 (5.9%)		1 (2.0%)	9 (17.6%)		4 (7.8%)	4 (7.8%)	25 (49.0%)	2 (3.9%)	2 (3.9%)
大坂市	58.9 (%)	22.8 (%)		5.5 (%)			8.6 (%)				4.3 (%)

即チ農漁村ハ牛乳ト重湯ヲ用フルモノ多キモ又穀粉煎汁所謂「スリコ」ヲ用フルモノ極メテ多ク、次デ粉乳、山羊乳ト重湯、牛乳、山羊乳ノ順位ニシテ、比較的補給品ニ恵マルモ、農山村ハ重湯所謂「スリコ」ヲ以テ補給スルモノ半數ニ近ク、次デ粉乳ト重湯、煉乳、煉乳ト重湯、粉乳ノ順位ニシテ牛乳、山羊乳ヲ用フルモノ極メテ少シ。之ヲ大阪市乳幼児ノ調査ニ比スルニ富山縣下農山漁村ハ重湯(所謂スリコ)ガ多ク使用サレ牛乳、粉乳ノ利用少キ點ガ注目サル、之ガ原因ハ牛乳、粉乳ノ入手困難ト母親ノ育児知識ノ不足ニヨルモノト思惟ス。

第3節 離乳ニ就テ

農村方面乳兒ノ離乳方法ニ未ダ不完全ナル點多ク存在スル事實ハ既ニ各調査者ノ一致セル處見ナリ。早川優氏ハ昭和13年9月神奈川県中郡成瀬村ノ小兒ニ就キ離乳狀況ヲ調査シ同村離乳着手ハ生後6ヶ月目ニ始まり2年1ヶ月目ニ及ブ間ニ分布シ、1年1ヶ月目ノ者最モ多ク、離乳完了ハ1年迄ノ者皆無ニシテ1年1ヶ月目ヨリ2年10ヶ月目迄ノ間ニ分布シ、1年8ヶ月目頃最モ多ク、又離乳期營養品ハオ混リ、オ粥ノ與

ヘ初メハ遅キニ過ギ而シテ米飯ガ不適當ノ時期ニ與ヘラルル等ノ點ヲ指摘セリ。横井博一氏ハ愛知縣無醫村神戸村、下山村ノ調査ニ於テ、母乳營養、混合營養共ニ生後7ヶ月乃至10ヶ月ヨリ副食物投與サレ離乳開始サルルモ、其ノ當初ニ與フル食品ハ雜炊、御飯等不適當ナルモノ多ク、又離乳進行遲々トシテ抄ラズ、2年前後ニ至ルモ母乳全廢ヲ見ルモノ極メテ少キ點ヲ注意セリ。

余等ノ檢診ニ際シ得タル所見モ概ネ以上ノ報告ト相似タル點アリ。今農山村ノ7ヶ月以後2年迄ノ小兒94名ニ就テ母乳ヨリノ離乳狀況ヲ觀ルニ、1年以後モ尙母乳ノミヲ以テ營養セラルル者14名ニ及ビ、又8ヶ月乃至1年ニ於テ既ニ御飯ヲ與ヘラルル者17名ニ達シ、其ノ他副菜ニ關シテハ特ニ考慮ハ拂ハレズ、其ノ時々折ニ觸レテ小兒ノ欲スル儘適當ト思ハラルルモノガ與ヘラルルモノノ如ク、農漁村ハ母乳ノミヲ以テ1年以後モ尙營養サルルモノ87名中2名ニ過ギズ。然レドモ1年前後普通米飯ヲ與ヘラルルモノ10名アリテ、オ粥ヲ用フルモノ多キモ其ノ量回数ハ全ク不規則ナルモノノ如ク、又副菜ノ添加ニ對スル注意ハ極メテ不充分ナリ。

第3章 疾病狀況

昭和11年宇留野氏ノ山形地方乳幼児7243名ニ就テノ報告ニ依レバ、身體異常所見ハ皮膚蒼白最モ多ク1175名ヲ算シ、次ニ結膜炎、濕疹「トリコヒチー」、「トラコーマ」、扁桃腺肥大、「凹胸、氣管支カタル」、「淋巴腺腫脹、中耳炎、耳漏、「ヘルニア」等ノ順位ニアリ。昭和16年8月ハ早川優氏等ノ神奈川県中郡成瀬村ノ小兒ニ關スル檢診報告アリ。氏等ハ該檢診ニ於テ眼角癩爛ノ患兒ヲ多數ニ認メタル外山形地方小兒疾病種類ト特ニ著シキ差異ヲ認メザリキト報告セリ。

余等ノ檢診ニ於テ當時障礙ヲ有シ病名ヲ附サレタ患兒延人數ハ農漁村172名(39.5%)、農山村151名(51.5%)ナリ。

今有疾患兒ヲ1ヶ月乃至6ヶ月、7ヶ月乃至12ヶ月、1年乃至3年、4年乃至6年ニ4分シ、疾病狀況ヲ觀ルニ次ノ如シ。

農漁村

1) 1ヶ月乃至6ヶ月

有疾者延人數12名(當該月例受診小兒ノ25.5%)—以下同様—「内男兒8名、女兒4名ニシテ最モ多キハ佝僂病ノ3名、次ニ消化不良症2名、膿痂疹、「ストロフルス」、汗疹、感冒、氣管支炎、中耳炎、消耗症、先天性儼毒夫々1名ナリ。

2) 7ヶ月乃至12ヶ月

有疾者延人數27名(47.3%)、「内男兒14名、女兒13名、最モ多キハ佝僂病ニシテ9名、次ニ消耗症6名、感冒3名、膿痂疹、消化不良症、百日咳、先天性儼毒各2名、濕疹1名ナリ。

3) 1年乃至3年

有疾者延人數90名(46.1%)、「内男兒51名、女兒39名ナリ。佝僂病最モ多ク34名ヲ算シ、次ニ膿痂疹16名、右慢性肋膜炎、消化不良症各6名、感冒5名、氣管支炎、消耗症、先天性心臟病、消化不良症各3名、濕疹、先天性儼毒、百

日咳各2名,「ストロフルス」,腦水腫,上肢麻痺,陰囊水腫,脱肛,鼠蹊部脱腸,頸部淋巴腺炎,癩各1名アリ.

4) 4年乃至6年

有疾者延人數43名(31.3%),内男兒25名,女兒18名ニシテ,膿痂疹最モ多ク11名,次ニ感冒7名,佝僂病6名,濕疹,肺門淋巴腺結核各4名,先天性心臟病2名,頭部白癬,先天性徽毒,百日咳,消化不良症,腎臟炎,陰囊水腫,鼠蹊部ヘルニア,眼瞼炎,痴愚各1名アリ.

農山村

1) 1ヶ月乃至6ヶ月

有疾者延人數15名(34.7%),内男兒9名,女兒6名ニシテ,佝僂病4名最モ多ク,次ニ濕疹,先天性徽毒,消化不良症ノ各2名,膿痂疹,氣管支炎,鼠蹊部ヘルニア,角膜軟化,發育障碍各1名ナリ.

2) 7ヶ月乃至12ヶ月

有疾者延人數38名(55.9%),内男兒21名,女兒17名ニシテ,佝僂病最モ多ク20名ヲ算シ,次ニ膿痂疹3例,消化不良症,發育障碍各2例,濕疹,水痘,先天性徽毒,感冒,中耳炎,急性結膜炎,角膜濁濁,鼠蹊部ヘルニア,消耗症,滲出性體質,脊椎破裂各1名アリ.

3) 1年乃至3年

有疾者延人數65名(48.5%),内男兒30名,女兒35名ニシテ,佝僂病26名ニテ最モ多ク,次ニ消化不良症13名,膿痂疹10名,濕疹,中耳炎各3名,肺門淋巴腺結核,腦性小兒麻痺,顔面神經麻痺各2名,先天性心臟病,腎臟炎,「アンギーナ」,發育障碍各1名アリ.

4) 4年乃至6年

有疾者延人數33名(50.6%),内男兒20名,女兒13名,佝僂病最モ多ク11名,次ニ先天性心臟病5名,膿痂疹4名,右慢性肋膜炎3名,消化不良症2名,濕疹5名,膿痂疹4名,濕疹,水痘,氣管支炎,結核性腹膜炎,顔面神經麻痺,滲出性體質,癩,痴愚各1名ナリ.

疾病ノ種類,頻度ハ年度,四季ニ依リ著シク相違セルヲ以テ實態ヲ把握スルニハ尙頻回ニ檢診ヲ要スルモノナルコト當然ノ事ナルモ,本檢診ニ於テ注意ヲ惹キシハ佝僂病患兒ノ比較的ニ多數存在セシコトニシテ,之ニ就テハ又次章ニ於テ述ベントス.次ニ比較的多キハ膿痂疹,消化不良症,氣管支カタル等ニシテ,又先天性徽毒極メテ少キ値ヲ示セシモ,更ニ精細ナル検査ヲ要スルト思考サル、モノハカナリ認メタルコトヲ附記ス.

第4章 佝僂病性變化ニ就テ

本邦ニ於ケル佝僂病ノ學術的記載ハ明治21年落合本治氏ノ報告ニ始ルモ,一般學界ノ注目ヲ惹クニ至リシハ,明治39年富山縣氷見郡ニ於ケル佝僂病ノ發見ニシテ,爾後多數學者ノ出張研究,實地踏査ニ依リ同地附近ニ地方病トシテ多數存在スルコト明ラカトナリ,之ガ原因,本態ニ關スル報告相踵ギ,本邦佝僂病研究ノ重要資料トナリタルハ既ニ周知ノ事實ナリ.

而シテ其ノ後諸學者ノ調査研究ニ依リ,佝僂病ノ侵淫ハ氷見郡ニ止ラズ,富山,石川,新潟等北陸各縣下ニ極メテ濃厚ニ存在スルコト明ラカトナリ,一方佝僂病ノ原因,本態モ漸次鮮明トナリ,豫防法及ビ治療法モ又現在完璧ニ近キ

感アリ.

然ラバ北陸ニ於ケル佝僂病ガ根絶セシメラレタルカト云フニ,決シテ然ラズ.余等教室外來ニハ今日尙多數ノ進行性佝僂病兒ヲ認メ,又本檢診ニ於テモ前記ノ如ク佝僂病多數ヲ診斷シ得タリ.氷見郡ニ於ケル佝僂病ノ問題ガ本邦學界ニ一大衝動ヲ與ヘシヨリ40年後ノ今日富山縣下農山漁村ノ佝僂病ニ就キ記載スルモ意義無キニ非ズト思考シ,敢テ本檢診所見ヲ記述ス.

1) 頭骨ノ佝僂病性變形

頭骨ノ佝僂病性變形ヲ認メタルハ農山村95名(21.7%)ニシテ長頭42名(44.1%),不規則形26名(27.4%),四角頭15名(15.8%),後頭部扁平

10名(10.5%), 舟状2名(2.1%)ナリ。農山村ハ43名(14.6%)=變形ヲ認メ, 内長頭32名(74%), 四角頭4名(9.3%), 不規則形3名(6.9%), 後頭部扁平3名(6.9%), 舟状1名(2.3%)ナリ。

2) 胸廓=於ケル變形

尙儂病性念珠環ハ農漁村154名(35.3%)=認メ, 内男兒86名, 女兒68名, 農山村ハ74名(25.4%), 内男兒36名, 女兒38名ナリ。ハリソン氏溝ハ殆ソド總テノ例=輕度=存在セシガ比較的著明ナルモノヲ集計スレバ農漁村159名(36.4%), 内男兒95名, 女兒64名, 農山村99名(22.6%), 内男兒53名, 女兒46名ナリ。尙儂病性鳩胸ハ農漁村12名(2.7%), 内男兒6名, 女兒6名, 農山村3名(1.0%), 内男兒1名, 女兒2名ナリ。

3) 脊柱ノ尙儂病性變形

脊柱ノ尙儂病性變形ヲ認メシハ一般=少ナク農漁村14名(3.2%), 内前彎3名, 後彎10名, 側

彎1名, 農山村9名(3.0%), 内後彎8名, 側彎1名ナリ。

4) 四肢ノ畸形

i) 前膊骨端腫脹ハ農漁村137名(31.4%), 内男兒75名, 女兒62名, 農山村22名(7.5%), 内男兒11名, 女兒11名ナリ。

ii) O字脚ヲ認メシハ農漁村11名(2.5%), 内男兒4名, 女兒7名, 農山村9名(3.0%), 内男兒6名, 女兒3名ニシテ, X字脚ハ農漁村22名(5.0%), 内男兒16名, 女兒6名, 農山村10名(3.4%), 内男兒4名, 女兒6名ナリ。

尙尙儂病性外部徵候比較の著シキモノ=就キテハ前膊骨, 下腿骨ノ「レントゲン線撮影ヲ行ヒ何レモ定型の尙儂病性骨變化ヲ確メ得タリ。

以上ノ所見ヨリ現在重症ノ尙儂病ハ比較の少ナキモ, 中等度尙儂病ハ尙多數=存在スルコトヲ確認シ得タル處=シテ之ガ撲滅ニハ尙一段ト努力ヲ要スルモノト思考セラル。

第5章 血色ニ就テ

一般=北陸小兒ノ血色ガ不良ナルコトハ既=識者ノ注意スル所ニシテ, 本檢診=於テ此ノ點=就キ集計ヲ行ヘリ。

今血色状態ヲ良, 不良=分チ, 顔色蒼白, 可視粘膜炎血性ナルモノヲ不良トナセバ第4表ノ如シ。

第4表 血 色

年 齡	農 漁 村			農 山 村		
	良 (括弧男)	不 良		良 (括弧男)	不 良	
		(括弧男)	%		(括弧男)	%
0 - 6 月	42(24)	8 (4)	16.0	40(20)	10 (6)	20.0
7 月 - 11 月	57(28)	18 (8)	24.0	68(30)	22(14)	22.4
1年 - 1年11 月	67(34)	20(11)	23.0	61(32)	23(17)	27.3
2年 - 2年11 月	67(38)	8 (4)	10.3	39(19)	8 (2)	17.0
3 年 - 4 年	112(55)	10 (8)	8.9	45(26)	6 (4)	11.3
5 年 - 6 年	89(53)	7 (4)	7.3	38(18)	9 (2)	19.1

即チ農漁村ハ不良ノモノ71名内男兒39名, 女兒32名, 農山村ハ78名内男兒45名, 女兒33名ナリ。

次=年齢別=見ルニ, 農漁村, 農山村何レモ7ヶ月乃至11ヶ月, 1年乃至1年11ヶ月=於テ高率=血色不良者ヲ認メタリ。

離乳期前後ノ小兒ニ血色不良ノモノ多數存在スルハ早川氏等モ神奈川縣成瀬村ノ小兒ニ於テ

證明セシ所ナルガ、原因ガ那邊ニ存スルヤ更ニ精細ナル檢索ヲ行フヲ要スルモノナラン。

第6章 總 括

乳兒期榮養法ハ他ノ農村ト同様混合榮養ヲ行フモノ多ク、6ヶ月迄ノ榮養方法ヲ觀ルニ農山村38.1%、農山村28.8%ノ高率ニ混合榮養ヲ認メタリ。而シテ各個人ニ就キ混合榮養ノ動機原因ヲ問診スルニ、母乳分泌不足ニ依ルモノ、外、屋外勞働ニ依リ授乳ガ制限サレ、然モ母乳ニ對スル認識不足ノ爲他ノ食品ヲ代用シ平然タルモノ少ナカラズ認メラレタリ。又混合榮養補給品ハ依然「スリコ」ヲ使用スルモノ多ク、牛乳粉乳ノ利用ハ都市ニ比シ著シク少シ。

次ニ離乳狀況ハ他府縣農村ニ於ケルト同様母乳榮養兒ハ1年以後モ長ク母乳ノミヲ以テ榮養セラル、モノ多ク、殊ニ農山村ニ於テ多ク、又比較的早く他ノ食品ヲ與ヘラル、場合モ初メヨリ御飯ヲ用フルノ多ク、他ノ副菜ニ對シテ考慮ヲ拂フモノ殆ンド無キ状態ニアリテ、離乳期榮養ニ關スル知識ノ普及ハ尙一段ノ力努ヲ要スルモノアリ。

疾病狀況ニ於テ他府縣農村ト著シク異ナルハ尙傷病ノ存在ニシテ殊ニ1年乃至3年ノ小兒ニ多ク、其ノ他消化不良症、膿痂疹、氣管支カタル、消耗症、濕疹等ヲ比較的の多ク認メタリ。先天性梅毒ハ一見診斷ヲ附シ得ル患兒ハ必ズシモ多カラザルモ疑ハシキモノハカナリ存在スルモノ、如シ。勿論一地方ノ疾病狀況ハカ、ルー回ノ檢診ニ依リ斷定シ難キコトハ當然ニシテ、更ニ回数ヲ重スルコトニ依リ其ノ實體ヲ明ラカニシ得ルモノト思考ス。

前記ノ如ク尙傷病患兒多カリシヲ以テ、本檢診ニ就テ得タル尙傷病骨變化ニ就テ集計ヲ試ミタルニ、頭骨ノ變形ハ農山村21.7%、農山村14.6%、尙傷病性念珠環ハ農山村35.3%、農山村25.4%、ハリソン氏溝ヲ有セシモノ農山村36.4%、農山村22.6%ノ多數ニ上リ、輕度ノモ

ノモ算スレバ殆ンド80%以上ニ及ベリ。

コノ事實ハ前報告ノ身體計測所見中胸圍ト頭圍トノ關係ヨリモ又推定シ得ル所ニシテ、農山村、農山村共ニ其ノ平均値ハ1ヶ年前後ニ於テ他府縣健康乳幼兒ニ比シ頭圍ハ大、胸圍ハ小ニシテ而モ其ノ差大ナリ。コノ頭圍ト大ナルハ化骨不充分ナル頭骨ガ迅速ニ發育スル大脳質組織ニヨリ押擴ゲラレタル所謂尙傷病性大頭ニ一致スルモノニシテ、又胸圍ト小ナルハ肋骨ノ柔軟化ニ依リ外力ノ壓迫ノ結果カ、或ハ肋骨ノ發育方向ノ異常ニ原因スルモノナルベク何レモ尙傷病ニ由來スルモノナリ。

即チ上記ノ各所見ハ富山縣農山漁村ニハ今日尙廣汎ニ尙傷病ガ存在シアルコトヲ如實ニ物語ルモノニシテ、一方尙傷病ガ呼吸器系消化器系各臟器ノ各種ノ刺戟ニ對スル抵抗減弱ヲ來ス等事實ヨリ、富山縣ノミナラズ尙傷病ノ濃厚ナル北陸ニ於テ幼若ナル小兒ニ肺炎、下痢及ビ腸炎ニテ死亡スルモノ多キハソノ原因ノ一トシテ、身體ノ外來刺戟ニ對スル抵抗減弱ヲ來ス尙傷病ノ存在ヲ考慮ノ内ニ入ルベキニシテ、尙傷病其ノモノハ直接生命ヲ脅ヤカス疾患ニ非ザルモ之ガ徹底撲滅ハ目下ノ急務ト云フベク、前歐洲大戰後ドイツガ尙傷病發生ニ惱ミシ事實ニ鑑ミ、小兒ノ充分ナル榮養ト完全ナル養護ニ一段ト注意ヲ拂フベキコトヲ痛感セリ。

血色ノ狀況ハ農山村436名中不良ナルモノ72名(16.5%)、農山村293名中86名(29.8%)ニ認メラレ、年齡的ニハ7ヶ月乃至11ヶ月及ビ1年乃至1年11ヶ月ニ高率ニ存在セリ。即チ離乳期前後ノ小兒ニ血色不良ノモノ多キ點、食餌ノ影響多分ニ存スルモ、此ノ時期ニ屢々認メラル、紫外線缺乏状態ト密接ナル因果關係ヲ有スルモノナラン。

第7章 結 語

昭和17年9月育兒檢診ヲ實施セル富山縣下農漁村3, 農山村2ニ就キ榮養方法殊ニ乳兒期榮養法, 混合榮養補給品, 離乳ノ狀況及ビ疾病ノ狀況殊ニ佝僂病性變化, 又血色ニ關シ集計ヲ行ヒ次ノ如キ所見ヲ得タリ。

1) 乳兒期榮養法ハ農山村, 農漁村共ニ混合榮養ヲ行フモノ都市ニ比シ高率ニシテ, 又其ノ補給品ハ「スリコ」ヲ使用スル者多ク, 育兒殊ニ榮養品ニ對スル注意極メテ少ナキコトヲ認メタリ。離乳ノ狀況ハ他府縣農村ニ於ケルト同様母乳榮養兒ハ1年以後モ長ク母乳ノミヲ以テ榮養セラレル者多ク, 又比較的早く他ノ食品ヲ與ヘラル、場合ハ初メヨリ御飯ヲ用フル者多ク, 副菜ニ對シテハ考慮ヲ拂フ者殆ンド無キ状態ニシテ, 離乳開始及ビ完了ノ遅延, 離乳期食餌不適

當ナルハ早急ニ改善ノ要アリ。

2) 疾病ノ狀況ハ佝僂病ニ關シ, 存在尙著シキハ注目スベキコトニシテ, 輕度ナル者ヲ加フレバ殆ンド80%ニ近ク, 發育ヲ阻害シ, 又他ノ疾病ニ對スル抵抗ヲ減弱セシムル有力ナル因子ト思考シテ誤リナカルベク, 生命ニ對スル直接ノ脅威ナキ爲, 一般ニ看過セラル、場合多キ感アリ。佝僂病豫防思想ノ普及, 佝僂病ノ早期治療ハ乳幼兒體力ノ確保上喫緊ノ要務ナリト思考ス。

撰筆ニ臨ミ御指導御校閱ヲ賜ハリタル恩師泉教授並ビニ本檢診ニ對シ種々御便宜ヲ與ヘラレタル富山縣衛生課, 及ビ村當局各位ニ深甚ナル謝意ヲ表ス。

參 考 文 獻

1) 泉仙助, 佝僂病, 大日本小兒科全書, 第11編, 第4冊, 昭和12年. 2) 遠城寺宗徳, 九大醫報, 第14卷, 昭和15年. 3) 中鉢不二郎, 宮崎ムツ, 小兒保健研究, 8卷, 昭和15年. 4) 宇留野勝彌, 臨床小兒科雜誌, 第10年, 1號-10號. 5) 早川優, 淺野秀二, 松村龍雄, 日本勞働科學研究所報告, 第2輯 農村保健狀態調查報告, 昭和16

年8月. 6) 横井博一, 兒科診療, 8卷, 8號, 昭和17年. 7) 高橋實, 東北一純農村ノ醫學的分析. 朝日新聞社發行, 昭和16年. 8) 林俊一, 農村ノ母性ト乳幼兒. 朝日新聞社發行, 昭和17年. 9) 小泉健吉, 中野長藏, 影山秀康, 伊藤隆信, 吉池一郎, 矢野穆彦, 十全會雜誌, 48卷, 12號, 昭和18年.